

奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために
Serve to Change Lives

2021-22年度 RI会長/シェカール・メータ
RI.D2590ガバナー/小倉 正
横浜旭RC会長/北澤 正浩

国際ロータリー第2590地区

横浜旭ロータリークラブ

事務所 横浜市旭区二俣川1-37-3 NJTS1階/〒241-0821
TEL.045-465-6702/FAX.045-465-6712
http://yokohamaasahirc.cho88.com
Email: asahirc@titan.ocn.ne.jp
例会場 横浜市旭区二俣川1-45-30工藤ビル
(榎岡田屋3階会議室)
例会日 毎週水曜日/12時30分～1時30分



横浜西部病院へフェイスシールド寄贈

横浜市へ医療機器支援

旭ふれあい区民まつり

2022年6月1日 第2464回例会 VOL. 53 No. 26

■司 会 幹 事 市川 慎二

■開会点鐘 会 長 北澤 正浩

■出席報告

会員数	21名	本日の出席数	13名
本日の出席率	65.00%	修正出席率	70.00%

■オンライン出席者

岡田、佐藤（真）、福村

■本日の欠席者

宋、田川、東谷、中谷、二宮、二宮（麻）

■誕生日祝い

平子会員 6.10

北澤会員 6.12



■会長報告

北澤 正浩

皆様、こんにちは。

今週の日曜日にアメリカのバイデン大統領が来日されました。今回の来日に合わせ、「QUAD（クアッド）」日本とアメリカ、インド、オース

トラリアの4カ国の首脳会議を開き、安全保障などの分野での連携の強化と、「インド太平洋経済枠組み（IPEF）」の発足を表明し、岸田首相も日本の防衛力を抜本的に強化することを明らかにしました。今回の最大の目的は安全保障面や通商面でも中国に対抗しようという意味合いがあるとニュースで聞きました。国際的な政治の駆け引きについて、精通していませんが、世界の覇権争いや周辺国の争いごとに日本は巻き込まれ、対応を迫られているのは明白で、今の世界情勢を見渡せば致し方ないことだと理解はできます。ただ、願わくは国家間の問題で世界が不安定になることなく、相互理解により安定した世の中であってほしいと願います。

ロータリーの使命は、職業人と地域社会のリーダーのネットワークを通じて、人びとに奉仕し、高潔さを奨励し、世界理解、親善、平和を推進することです。

現在、ロータリーはロシアのウクライナへの侵攻に対し、募金活動等の戦争による被災者人道的救援活動を行っておりますが、さらになすべきこととして、紛争まで至らない為の国際交流等による平和構築にも力を入れていかなければなりません。すでに奉仕プロジェクトや平和フェロー・奨学生への支援を通じ、貧困、差別、

民族間の衝突、教育機会の欠如、リソースの不平等な配分といった紛争の根底にある問題に取り組んでいますが、混沌としたこれからの時代には、ロータリーが世界から求められている役割が、さらに重要になってくるように思います。

■国際奉仕 五十嵐 正
ウクライナ支援募金について、最終頁参照

■ニコニコ BOX

北澤 正浩／新川様、今年度は何度も卓話をお願いして申し訳ございません。

市川 慎二／新川さん卓話宜しくお祈りします。

新川 尚／本日は宜しくお祈りします。

安藤 公一／新川さん卓話宜しくお祈りします。

内田 敏／新川さん本日の卓話宜しくお祈り致します。

平子 智章／新川さん、本日の卓話宜しくお祈りします。

■卓話「親睦と奉仕」 新川 尚

※源流の会 <https://genryu.org/>

主催 田中 毅 (たなか つよし)

尼崎西 RC RID2680 地区 PG

ロータリアンに正しい奉仕理念を理解していただくための情報伝達媒体として、1999年5月に個人的サイト「ロータリーの源流」を開設、その後、2010年5月より「源流の会」と名称変更をして、運営形態も会員制度に改め収録内容も、内外の原著を中心に大幅に増やした。

「親睦と奉仕」

親睦を目的として出発したロータリーも、長く真摯な論議を重ねながら、大きな変貌をとげました。その結果、現在のロータリーの定款や細則の中から親睦の文字を見つけ出すことは難しく、僅かに親睦活動委員会の項目に、その痕跡を止めているに過ぎません。もはや、ロータリー・ライフの中で親睦は不必要になってしまったのでしょうか。

ロータリーの二本の柱として、ロータリアンのほとんどは親睦と奉仕をあげますし、新しいロータリー年度が始まって、新会長の挨拶にも決って親睦と奉仕という言葉が述べられます。

親睦と奉仕がロータリー・ライフを支える二本の大きい柱であることは、疑いのない事実です。親睦が失われればクラブは崩壊するだろうし、奉仕がロータリー運動の大きな目的であることは疑いのない事実です。

親睦を図りたければ、誰にだって無限の機会があります。気の合った仲間とゴルフや旅行に行くもよいし、カラオケやバーでだって親睦を図ることができます。一人一業種だなんて料簡の狭いことをいわなくても、同業者同士でも充分親睦は図れます。ロータリアンになって、定例の会合に出席しなければ親睦が図れないと言う理屈を非ロータリアンが聞いたら、こじつけとして一笑に付されるに違いありません。

ロータリーは敢えて親睦と奉仕の解釈を、世間一般の人たちが考える解釈と異なる次元に置いています。

世間一般の人たちが考える親睦と奉仕とロータリーが考える親睦と奉仕とに異なった解釈があることに気付いて、その言葉を広辞林で引き、更に、fellowship や service の意味をウェブサイトで調べたとしても、それは無駄な作業に過ぎません。ロータリーが定義する親睦と奉仕は、いかなる辞書を引いても正しい解釈が活字化されていないロータリー独自の概念であり、さらに、それを正しく理解しない限り、ロータリー思想の原理を語ることはできないのです。

fellowship を「親睦」と訳したことにも問題があるかもの知れません。むしろ、「友情」とか「友愛」と訳す方が理解し易いでしょう。ちなみに、米山梅吉がポール・ハリスの This Rotarian Age を翻訳するに当たって、その書名を「ロータリーの理想と友愛」としたことは、理想＝奉仕、友愛＝親睦を意味するものであり、戦前のクラブ組織表では、親睦活動委員会の代りに友愛委員会の名称が使われています。

ロータリーが定義する親睦とは、一体、どんなことなのでしょう。敢えて結論を先に述べれば、「親睦」とはロータリークラブが、クラブとして存続していく上で欠かすことの出来ない



い必要条件となる、ロータリアン個人個人の心が結合した状態を表す概念なのです。

ワットの蒸気機関の発明を契機とした産業革命の結果、資本主義が発達し、19世紀後半世紀後半から20世紀の初頭にアメリカに於いて、アメリカン・ドリームという美名の下でその爛熟期を迎えました。資本を蓄積した少数の人だけが成功者ともてはやされる、極端な資本主義の町では、同業者はすべて相手を蹴落とそうとするライバルであり、広告はすべて誇大か虚偽であり、濡れ手に粟のビジネス・チャンスハイエナのごとく探し回る状態の中で、友情などが生まれる素地はまったくありませんでした。

その中で同じ価値観を持ち、共にすべてを語り合える仲間の集まりとして、ロータリークラブができたのです。

ロータリー運動の実体を、見事に表した言葉として、「入りて学び、出でて奉仕せよ Enter to learn, Go forth to serve」と言う言葉があります。世の中のあらゆる有用な職業から選ばれた裁量権を持った職業人が、一週一回の例会に集い、例会の場で、職業上の発想の交換を通じて、分かち合いの精神による事業の永続性を学び、友情を深め、自己改善を計り、その結果として奉仕の心が育まれてきます。この例会における一連の活動のことを計り、その結果として奉仕の心が育まれてきます。この例会における一連の活動のことを「親睦」と呼ぶのです。例会で高められた奉仕の心を持って、それぞれの家庭、職場、を「親睦」と呼ぶのです。例会で高められた奉仕の心を持って、それぞれの家庭、職場、地域社会に帰り、奉仕活動を実践します。

これが理想とされるロータリー・ライフです。

「親睦と奉仕」の対比は、「理論と実践」、「奉仕の心の形成と奉仕の実践」、「クラブ内の活動とクラブ外の活動」「原因と結果」にも対比させることができます。すなわち、ロータリー・ライフの一方の柱はクラブ内の活動を通じて行われる「親睦」すなわち「奉仕の心の形成」「理論構築」「ロータリー活動の原因」であり、これらのことを行う場は例会であり、もう一方の柱は、クラブ外で個々のロータリアンによって、家庭、職場、地域社会、国際社会を対象として行われる「奉仕活動の実践」であり、それが「ロータリー運動の結果」となるのです。

原因が無ければ結果は生じません。従ってクラブ例会を通じて得られる、ロータリーの親睦即ち奉仕の心の形成が欠けるとロータリー運動そのものが成り立たなくなることから、これに関係する幾つかの具体的な約束ごと、即ち、一人一業種制度や例会出席などはロータリー運動成立の必要条件と定められているのです。必要条件はロータリーの理論を構築する哲学であり、これを否定することはロータリーを否定することになるため、如何なる理由があっても変更したり、勝手な解釈を加えることはできません。クラブの自治権に名を借りて、職業分類や出席規定の緩和が許されない理由もここにあります。敢えてこれを強行したければ、ロータリークラブの名前を返上するか、退会する以外に途はないのです。

最近の規定審議会で、これらの必要条件が次々と緩和される傾向にあります。ロータリー運動の中核はRIではなく、クラブと個々のロータリアンですから、RIがどの方向に進もうとも、クラブとロータリアンはこれらの必要条件を遵守する必要があります。

これに対して、「奉仕の実践」は充分条件であり、時代の推移と共に奉仕の実施方法や内容が変化してきたことは、ロータリーの歴史がこれを物語っています。個人奉仕が原則とされながら、クラブによる団体奉仕が条件付きで認め

られ、非金銭的奉仕が原則とされながら、WCSやロータリー財団活動において金銭的奉仕が認められているその一例です。

充分条件に属する事柄については、敢えて親睦を壊すような議論は避けて、妥協と調和を図ることをロータリーの寛容の精神と考えています。

ロータリーにおける親睦が、何故、奉仕の心の形成と同義になるのか、更に一人一業種制度や例会出席などが、何故、親睦のカテゴリーに入っているのか、なおかつ、ロータリー運動成立の必要条件になるのかについて、更に深く考えてみたいと思います。

ロータリーは一人一業種の職業分類に基づいて、会員を選挙します。ロータリーの例会を通じて学んだ奉仕の心を、地域社会のあらゆる職種の人に分け与えるために、地域社会に存在する有用な職業の代表を、一人一業種としてなるべく多く選ぶことを意図したものであるとしても、一人一業種制を定めた根底には、同業者の競争意識や対立による親睦の阻害を排したいとするロータリーの友情があることは否定できません。

世に有用な職業をすべてを正業と考えるロータリーの職業観から、職業の貴賤や上下関係を認めていません。大会社の社長も小さな商店の店主も、元請けも下請けも、すべて平等であり、世俗の論理や縦社会のしがらみ一切を認めていないのです。すべての職業は価値あるものとする考えに、すべての職業は尊重されなければならないという発想が生じ、それが職業倫理を高めるといふ奉仕の心の形成の発展していきまします。ロータリアン同士はすべて対等と考えなければ、真の親睦は生まれません。親睦あるが故、或るときは師となり、徒となって、互に切磋琢磨しながら奉仕の心を形成する作業が可能になるのです。

資本主義を背景として生まれたロータリー運動は、最高の利潤を追求したいという利己心と、世のため人のために如何にすべきかという利他

心を調和する哲学です。

永続性のある適切な利潤を獲得するために到達した経営哲学が「良質の職業人とは、自己改善を重ねて、自分の職場を健全に守ると共に、取引先・下請業者・従業員・顧客・同業者など、自分の事業と関係を持つすべての人に幸せを分かち合うことである。そして、その心を持って事業を営めば、必ず最高の利益が得られることを自分の職場で実証することによって、奉仕の精神の必要性を地域全体の職業人に伝えていく」という職業奉仕の理論を構築し、お互いがそれぞれの業界の職業情報を持ち寄ってその理論を実践する具体的な方法を研究するのが例会の場なのです。

学問上も実戦上も、経営方法や管理方法が高度に進化している現在、ロータリーの経営哲学のみに頼ることに不安や疑問を抱く人もいるに違いありません。確かに企業経営のノウハウは選択に迷うほど巷に溢れていて、ロータリーの経営哲学などは古典的なものに映るかも知れません。しかしそれらの新しい理論は、一時的に企業を隆盛に導く高度な戦略や戦術であったとしても、哲学として捉えるには、ほど遠い存在に過ぎないことは、バブルの時期にあれほど隆盛を極めた経営戦略や戦術が、いかに頼りないものであったかを証明しています。

それに反して、ロータリーが定義している職業奉仕は、事業経営を学問と捉えてそれを体系化したものであるだけに極めて完成度は高く、かつ、事例も豊富であり、その経営理論は永遠の真理である哲学の範疇に入るとも言えるでしょう。1927年からの世界大恐慌でも、ロータリーの職業奉仕理論を真摯に捕らえて実践したロータリアンの落伍者が極めて少なかった事実がこれを証明していますし、バブル崩壊後の日本においても同じことが言えると思います。

1915年に発表された「ロータリー倫理訓」第6条に「もし疑わしい際には厳格な意味の責任義務を越えて一層のサービスを行うこと」という取り決めがあります。これを厳密に解釈す

れば、販売した商品については永久に責任を取らなくてはならず、実行不可能とする反論が強く起こりました。しかし、敢えてこれに挑戦した企業も沢山あります。工具メーカー「スナップオン」社は、購入時期、場所を超越して、故障したら無償交換する原則を守った結果、最も信頼できるメーカーとして不動の地位を築いています。昨今やっと話題になり始めた「製造物責任」や「リコール」の発想は、90年近くも前にロータリーが考えた職業情報なのです。

トップ・シークレットである企業情報を披露し、お互いの事業発展に利用しあう精神的互惠は、ロータリーの特徴的な制度であり、会員同士の友情に裏打ちされた信頼感がなければ、到底不可能なことです。不況のときこそ、他の会員の職業奉仕の実践例や職業情報を、積極的に自分の職場に生かす好機でもあるのです。

悩みごとを相談する真の友人こそロータリーの友でなければならず、それを可能にするためには、ロータリーの友情即ち親睦を更に高めなければなりません。もし、事業不振のため退会を余儀なくされる会員がいたとすれば、そのクラブにはロータリーの親睦がなかったことを証明することになるのです。職業上の相談はどんなことでもクラブ内の友人に相談できる。どんなことを相談しても、自分のマイナスになって返ってくることは絶対にない。これが可能のクラブのことを、親睦のあるクラブと言います。その前提となるのが一人一業種制度なのです。

奉仕の心はクラブ・ライフを通じて育まれますから、奉仕の心を形成する場は、クラブの正式な会合、即ち、例会ということになります。例会を通じて、ロータリアン各自が、高質で豊かな奉仕の心を培うためには、例会出席は欠かすことのできない義務であり、別な言い方をすれば、他のロータリアンに対する友情の証でもあります。

出席不良の会員や4回も続けて欠席するような会員から友情を期待したり、奉仕の心を語りあうことは不可能であり、そのような会員を放

置することはロータリー運動そのものを危うくするという理由から、「退会」という最も厳しい措置が講じられるのも当然のことです。

定例の日時と場所で例会を開くことは、世界中のロータリアンに対する約束事であり、特別の事情がない限り変更したり中止してはなりません。親睦会や記念行事が特別の事情に当たらないことはいままでもないことであり、例会とは切り放して行うべきでしょう。

メイクアップの期間を2週間に延長したり、理事会の裁量で、年4回の休会を認める措置は、ロータリー運動を成立させる絶対的条件に抵触するものとして、これを変更した規定審議会の責任は重大と言わざるを得ません。2001年の規定審議会で、クラブ理事会が認めた奉仕活動に出席した場合をメーキャップとして認めるという制定案が可決されましたが、ホーム・クラブの例会に出席しなければ、何の意味もないのです。「例会を取りやめることができる」という表現は、必ずしも休会を強制する意味ではありませんから、例会出席を少しでも減らそうとするロータリアンに対しては、理事会は厳格に判断を下すよう留意すべきです。何れにせよ、軽々しく例会変更や休会をして、全世界のロータリアンの親睦を凶の特権を奪うことがあってはなりません。

一人一業種で選ばれた会員が毎週開かれる例会に集って、お互いが師となり徒となって、奉仕の心を学び自己研鑽を重ねます。それをロータリー運動の一つの柱と考えて、それを達成するために試みられる、ロータリアン同士の真の友情に裏打ちされた凡ゆる活動のことを、ロータリーでは「親睦」と定義付けているのです。

ロータリークラブの会員の中にも、親睦と親睦活動を混同する人が多いようです。親睦会やゴルフ会に参加することは親睦活動に参加することであって、ここで述べる親睦とは違った次元のものです。親睦はロータリー運動を成立させる必要条件ですが、親睦活動はクラブ奉仕に属する充分条件の分野にあり、親睦会を欠席し

たからといって会員資格を云々されるべき性格のものではありません。親睦活動がクラブ奉仕の充分条件の範囲内で、親睦というロータリー本来の運動を高めるために補助的に活動することは大切なことです。しかし、親睦活動委員の任務を、親睦会の幹事や同好会の世話役に留めることは大きな誤りです。確かに会員が心を打ち解けあう手段の一つとして、親睦会やクラブ活動などのレクリエーションも必要です。しかし、親睦を深める最適の場所は、毎週一回の定例の例会であることを忘れてはなりません。例会において、いかに友情を深めるかを考え実行することと、いかにして真の親睦が保たれるような環境を整備することが最大の任務なのです。

RIBIの推奨クラブ細則には、Fellowship Committee 親睦委員会とは別に Entertainment Committee 余興委員会が設けられており、親睦と親睦活動の違いが定義づけられています。

ほとんどのクラブでは、新入会員は親睦活動委員会に配属されます。これは、新人だから下働きに使おうということではなく、親睦活動委員として毎例会、会員相互の親睦を深める活動に従事することによって、一日でも早く、古い会員と融和を図ることを期待しているからなのです。

友情溢れる例会を通じて、ロータリアンがお互いに切磋琢磨し自己改善に務めることで、ロータリーの説く親睦が一層深まり、奉仕の心が高まっていきます。

「中略」

「ロータリー精神は親睦と奉仕の調和の中に宿る」

1907年から1913年にわたって続けられた、親睦か奉仕かをめぐる激しい論争の中で残された言葉通り、奉仕の心を育くむ原動力として、会員相互の親睦は決して欠かすことのできない大きな要素です。親睦と奉仕は相反関係にあるのではなく、相互に支えあいながら回転する二枚の歯車であると考えなければなりません

■ RID2760/2018-19/ ガバナー 村井總一郎

奉仕と親睦について考えてみる。

よく奉仕と親睦はどちらが優先ということではなく車の両輪だという方がおられる。また、それは二輪車の前輪と後輪で、前輪が奉仕で進むべく方向を示し、そのエネルギーは後輪の親睦によって推進力を与える、と言われる方もおられる。

それぞれ、この短い言葉だけで表せない意味合いがあるので、どちらがどうという話をするつもりはないので、ここではロータリーの歴史から考えてみたい。

ロータリーはご承知の通り、1905年ポールハリスによりシカゴで生まれた、当初は明らかに社交クラブであって、親睦と信頼できる取引が強調された。人生上、取引上で信頼できる仲間を作ることであった。その後、ドナルドカーターやアーサーフレデリック・シェルドンら加わり、奉仕の概念が出来上がってきた。

と言うことは、まずは親睦が先である、と考えてはどうだろうと思う。

伊丹RCの故深川純一PGは、当地区の講演で次のように言われた。『原始、音楽は太鼓などのリズムから生まれ、その後メロディがついた』この話はロータリーでは、まずは親睦があって、その後奉仕がついてきたということの説明であったので、私にはわかりやすい話であった。

ではどのように親睦から奉仕に進めて行けばよいかとすることを考えてみる。

奉仕をするということは、自分が高潔な人になり、思いやりの心で職業を営まなくてはならない。そして同じ心を持つ人が集まってクラブとして奉仕の活動をしなくてはならない。しかし、いきなり人と人が出会ってもすぐに奉仕活動には進みにくい。そこで親睦活動を通じてお互いの仲間意識を強くしていかななくてはならない。

ここで親睦活動と表現したが、研修委員会では『親睦と親睦活動はどう違うか』という設問を良く行っている。親睦活動は、ゴルフ・麻雀・旅行・カラオケ・コーラスなどの共通の趣味の

方が集まって活動することである。一方親睦(Fellowship)は仲間づくりである。親睦活動は仲間づくりの一つの手段であると、研修委員会の見解である。

ロータリーの目的の奨励項目の第1に『知り合いを広めることによって、奉仕の機会とすること』と書いてある。知り合いを広めるとは、何人名刺交換したかではなく、奉仕の仲間を作ったか、と解釈したい。まずは仲間づくりと言うことであろう。

クラブの運営からこのことを考えてみる。設立時はまず親睦活動を重視し仲良くなることであり、例会の出席率を上げることである。そしてクラブの会員として、どのような奉仕があるか、どのような奉仕が出来るかをしっかり学び考えて、活動していただきたい。

ロータリーの活動目的は、親睦活動ではなく奉仕活動であるのだから。

さて、同好会が盛んなクラブがあるが、同好

会の参加のためにクラブの会員となったような方はいないだろうか。同好会の行事は出るが、奉仕活動には参加しないという方はいないだろうか。例会に出てきても、次の同好会の案内の相談ばかりと言う会員はいないだろうか。

同好会の活発な活動を否定するつもりは全くない。仲良くすることが重要だとの考えであるから当然である。言いたいことは親睦活動の目的は、奉仕活動の為の仲間づくりと、仲間と接することで養われる奉仕活動の為の自己研鑽であると思う。

会員の多様性という考えがあるので、奉仕が命の会員もいれば、親睦が命の会員がおられても、それはそれでよいと思う。ただしバランスがとれているということが大切で、クラブの活動方針がどのようになっているかである。

それはクラブ会長のリーダーシップが問われる課題でもあると思っている。

■次回卓話 北瀬 達也様(地区幹事・横浜RC)

2022年度4月出席率一覧表

員数	会 員 名	ホームクラブ	他クラブ	出席率	員数	会 員 名	ホームクラブ	他クラブ	出席率
1	安藤 公一	75	25	100	14	岡田 隆	75	25	100
2	福村 正	0	0	0	15	太田 勝典	－出席規定免除－		
3	五十嵐 正	100	0	100	16	佐藤 真吾	100	0	100
4	兵藤 哲夫	－出席規定免除－			17	佐藤 利明	－出席規定免除－		
5	市川 慎二	100	0	100	18	関口 友宏	100	0	100
6	平子 智章	100	0	100	19	宋 謹衣	75	25	100
7	北澤 正浩	100	0	100	20	田川 富男	100	0	100
8	増田 嘉一郎	100	0	100	21	東谷 充	75	0	75
9	目黒 恵一	－休会扱い－			22	内田 敏	－出席規定免除－		
10	中谷 逸希	50	0	50	23				
11	新川 尚	100	25	125	24				
12	二宮 登	100	0	100	25				
13	二宮 麻理子	100	0	100	26				
例会日	6日	13日		20日	27日		平均		
例会出席率	$\frac{19}{21}$	90.48%	$\frac{15}{20}$	75.00%	$\frac{18}{21}$	85.71%	$\frac{15}{20}$	75.00%	
修正出席率	$\frac{19}{21}$	90.48%	$\frac{15}{20}$	90.00%	$\frac{18}{21}$	85.71%	$\frac{16}{20}$	80.00%	82.80%

横浜旭RCとして募金の寄付先についての検討

(現状のご説明)先週(5月25日)までの寄付の総額は、皆様のご尽力によりまして100.514円となっております。

また、寄付先として打診しておりますが、元財団奨学生の朝倉さんの関係では、今のところ連絡が無く、進んでおりません。そこで、寄付先の選考に候補付を少しまとめてみましたので、皆様のご意見を伺いたいと思います。

●寄付先の対する条件

- ① 寄付金の用途が出来る限り具体的・明確であること。
(支援者への説明や貢献実感がもてる)
- ② 信頼できるロータリーもしくはロータリーの関連団体や個人

●寄付先の候補

- ① ロータリー財団
 - ・メリット：信頼できる団体である
 - ・デメリット：受け皿が大きいので具体的な使用用途は不明、
また5月以降の寄付はウクライナ特定での支援ではない。

ロータリー財団の活動状況；(公式HPより抜粋)

2022年4月30日までにロータリー災害救援基金に寄せられたすべてのご寄付は、1,500万ドル(約19億6400万円)以上の寄付を募り、現在までに、この戦争による被災者支援のために、90件の災害救援補助金(総額240万ドル・約3億)が授与され、ウクライナ難民またはこの戦争の被災者へ、水や食糧、シェルター、医療物資、衣服といった人道的救援活動に優先して活用されています。

ただ、ウクライナへの支援の目的に限定した寄付は、4月30日をもって終了とされ、5月1日以降の災害救援基金へのご寄付は、復興援助を必要とする全世界の被災地で活用可能となります。



② クラフ・地区による救援活動

- ・メリット：こちらの希望に合った支援先を選べる。直接支援出来る。
- ・デメリット：直接的な関わりのないクラフから最適な支援先を選び出せるかは未知数。

2-1 /直接的な支援先候補

➡第2232地区(ウクライナ・ベラルーシ)調整委員会

おおよその募金の使途が明示されている(現在の緊急ニーズは医薬品とあり具体的医薬品リストもある)。

支援方法は直接募金する他、医療機器の寄贈も可能。寄贈の場合は第2232地区バストガバナークが窓口になっている。

第2232地区調整委員会について

同委員会は、ウクライナで人道的災害防止のため設置され、戦争被害者の支援とRIからの支援の調整を行い、主要な病院と連絡を取って緊急ニーズの特定を行っている。

現在の緊急ニーズは医薬品です。私たちは、口座に資金を留めずにできるだけ早く医薬品を購入することに努めています。

ウクライナへの安全な支払い方法については、現在も現地の銀行システムが安定して機能しており、インターネットバンキング(インターネット)を利用した銀行サービスが可能であることが確認されています。

以下は、緊急に必要とされている医薬品のリストです。医療機器の寄贈に関するご質問は、バストガバナークの Mykola Stebjancko氏 (snikko@ukr.net)までご連絡ください。

第2232地区への支援事例(アメリカのクラフの例)

支援の主な流れとして、止血帯、止血ガーゼ、血圧計など、集まった大量の医療物資は、北米ウクライナ医師会(UMANA)が運営するシカゴのオヘア国際空港近くにある倉庫へ集められ、貨物輸送機でシカゴからヨーロッパに運ばれ、現地の会員の協力を通じてウクライナ各地へと届けられます。シカゴの倉庫内では、UMANAとロータリーのボランティアが、送送前の物資の整理と仕分け、梱包を行っています。

1950年に創設されたUMANAは、北米・ウクライナ間の医師の交流を通じて教育を促進する活動を行っていたが、戦争勃発後はUMANAのボランティアがウクライナへの医療物資の発送や、医師と製薬会社とのネットワークを通じて医療物資・機器の収集を開始。ほどなくして、このプロジェクトにロータリー・クラフも加わりました。「戦争のただ中で、しかもロシア軍が病院を標的とすることもある中で、ウクライナ国内のロータリーボランティアたちが国中に物資を届けているという事です。」

2-2 直接的な支援先候補

➡Disaster Aid International (ロータリーのパートナー団体)

— <https://www.disasteraidinternational.com/>

災害支援に特化した団体で、ロータリー・アソシエーション単位で団体に加盟する形での実際に支援活動を行える。特別に訓練や講習を受けて、派遣される。また寄付という形での支援も可能。具体的な支援活動がリアルタイムに報告されている。

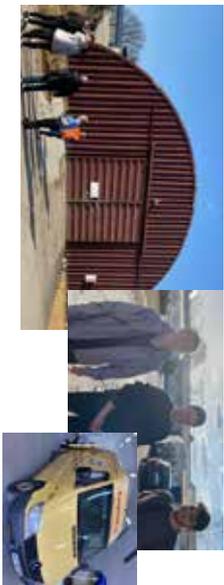
以下DisasterAidInternationalのお知らせ

ウクライナに最も近いDisasterAidInternationalのパートナーであるアラハを拠点とするDisasterAidEurope(DAE)は、危機が始まって以来、ウクライナのロータリーと絶えず連絡を取り合っています。これにより、必要なものが明確になりました

支援事例



ベルギーからの支援物資を運ぶ。全ヨーロッパからの支援物資(救急設備、応急処置機器など)は寄付により地元で購入し、それをアラハへ運びます。そして先週、最初の配達ミッションがアラハからウクライナ国境近くのスロバキアのコンツェに向けて出発しました。



地元のロータリーによって提供された緊急倉庫に配達され即座にウクライナのバンに移されました。バンはウクライナの学生によって運営されており、ウジホロド(ウクライナ西部の都市)へ。荷物を運搬するウクライナの学生。ウジホロドに到着すると、地元のロータリーによって管理され、具体的に支援を必要とされる場所へ運ばれます。